

News Letter

自治医科大学附属病院 卒後臨床研修センター

令和8年2月

こんにちは。ここ栃木では梅の花が開花しました。少しずつ春がやってきました。しかしまだまだ寒い毎日。体調にはお気をつけください。さて、今月もNewsletter 第90回配信です。

【診療科紹介 耳鼻咽喉科】

研修医・医学生の皆さんは、耳鼻咽喉科をどの程度ご存じでしょうか。

本稿では、私たち耳鼻咽喉科・頭頸部外科の魅力をご紹介します。

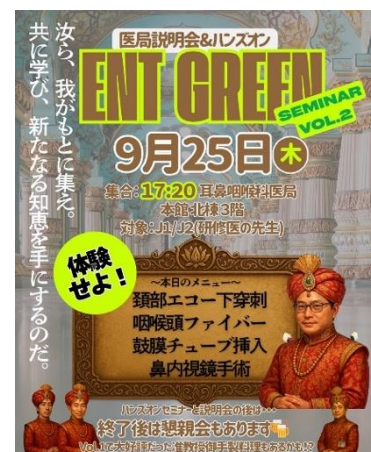
耳鼻咽喉科はその名前にあるような、耳・鼻・咽頭・喉頭だけでなく、甲状腺や耳下腺などの頸部も含めて、非常に多様な領域を担当する診療科です。また、特徴として新生児から高齢者まで幅広い年齢層を対象にしていることや、外科的な治療と内科的な治療の両者があることがあります。多くの脳神経や血管、側頭骨・顔面骨に至るまでを扱い、疾患の病態も極めて多彩です。

私が考える本診療科の最大の特徴は、「五感」に直結する領域を扱う点にあります。聴く・話す・食べる・呼吸する・匂いを感じるといった、日常生活の質（QOL）に直結する機能を守り、回復させる医療を担っています。一方で、頭頸部悪性腫瘍など生命に関わる疾患も多く、根治性とQOLの両立を常に意識した診療が求められます。患者さんの訴えを丁寧にくみ取り、多角的に評価し、治療によって症状が改善したときの耳鼻咽喉科ならではの達成感、大きな魅力です。

当科の特徴としては、小児耳鼻咽喉科や耳科手術、腫瘍内科、頭頸部超音波診療、音声外科があると思います。年間約600件以上の手術を実施しており、北関東だけでなく、全国から患者様が来られています。また、院内からも多岐にわたるコンサルトが寄せられており、気管切開や嚥下評価の依頼をはじめ、鼻出血、難聴、めまい、偶発的に発見された頭頸部腫瘍など、幅広い臨床経験を積むことができます。

教育面では、初期研修医を対象に“グリーンセミナー”を年3回開催しています。福原准教授と野田講師が考案した本セミナーは、喉頭ファイバーや頸部エコー下穿刺、耳内操作、鼻内視鏡操作などを実際に体験していただくものです。早期から「手を動かして学ぶ」教育を重視しており、“グリーン”の由来はグリーンカレーを手作りで作って食べられることらしいです。また、女性医師や育児中の男性医師も、家庭と両立しながら活躍できる体制整備が進んでいます。

ぜひ、自治医科大学附属病院に入職された際には、耳鼻咽喉科でのローテーションをご検討ください。医局員一同、皆さんと共に働ける日を心よりお待ちしております。

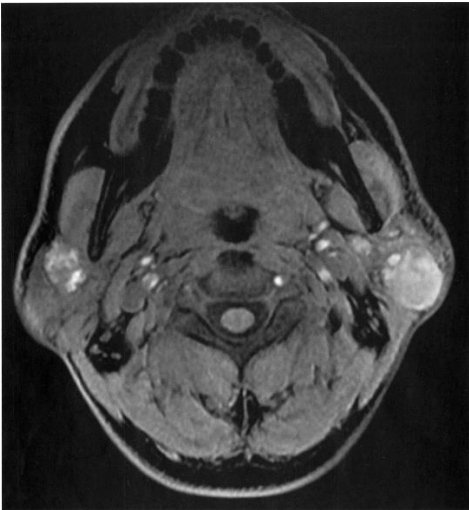


【医師国家試験予想問題】

医師国家試験の予想問題を作成しました。ぜひ挑戦してみてください。

【問題】

70歳の男性。左耳下部の腫脹を主訴に来院した。10年前から左耳下部に腫瘤を自覚し、3年前から右耳下部にも小さい腫瘤を自覚していた。腫瘤は一時増大と縮小を繰り返していた。右耳下部には直径20mm、左耳下部には直径35mmの弾性軟の腫瘤を触知した。皮膚との癒着はなく、圧痛は認めなかった。頸部単純MRIの脂肪抑制T1強調水平断像を次に示す。



診断はどれか。

- a 耳下腺多形腺腫
- b 正中頸嚢胞
- c Sjögren 症候群
- d 唾石症
- e Warthin 腫瘍

【正解】 e

【解説】

耳下腺の病変であることから正中顎嚢胞は否定的、腫瘍性病変であることから唾石症および Sjögren 症候群は否定的である。耳下腺の良性腫瘍である Warthin 腫瘍と耳下腺多形腺腫が鑑別に挙げられる。中年以降の男性の症例であること、両側性にみられること、弾性軟であることから、Warthin 腫瘍と診断できる。また Warthin 腫瘍の悪性転化はまれだが多形腺腫の場合は悪性転化があるので注意が必要である。

【メッセージ】

いかがでしたでしょうか。正解できたでしょうか。

医師として重要なのは、提示された情報の妥当性を自ら判断できる知識と臨床的思考力を身につけることです。本企画が、学習の一助となれば幸いです。

